

## ◎ 美術館情報

最新の情報は、各施設の公式ホームページなどでご確認ください。

### 1. サンリツ服部美術館【長野・諏訪】 (<https://sumritz-hattori-museum.or.jp/pages/265/>)

12月2日(火)～2026年4月12日(日)

企画展:「舶来の陶磁器」

四方を海に囲まれた日本は、中国をはじめとした様々な国の文化に影響を受けながら独自の文化を育んできました。長い歴史のなかで多種多様な品物が日本へ輸入されましたが、時代や国に関わらず多くもたらされた工芸品の一つが陶磁器です。本展では、鎌倉・室町時代に尊ばれた「唐物」、桃山・江戸時代に大きく展開した茶の湯で用いられた「茶陶」、大正・昭和期に流行した「鑑賞陶器と朝鮮陶磁」の3つのテーマから構成し、舶来の陶磁器とそれらを柔軟に取り入れながら発展していった日本の文化をご紹介します。展覧会を通じて、中世から近代にかけて日本へもたらされた中国、朝鮮半島、東南アジア、ヨーロッパの魅力あふれる陶磁器をお楽しみください。



### 2. 兵庫陶芸美術館【兵庫・丹波】 (<https://www.mcart.jp/exhibition/e3703/>)

12月6日(土)～2026年2月23日(月・祝)

丹波焼の美—田中寛コレクションを中心として—

丹波焼は、平安時代末期に常滑焼(愛知県)など東海地方の窯業技術を取り入れて操業を開始し、中世には壺・甕・播鉢を中心に無釉の焼締陶器を生産しました。この時期に作られたものは、焼成によって茶褐色に発色した土肌や窯の中で燃料の薪の灰が器肌に降りかかり、それが溶けてガラス化することによって現れた鮮緑色の自然釉が見どころとなっています。近世には、宍窯から登窯へと窯の構造が転換し、土部の塗布や釉薬の施釉など、多彩な装飾技法を取り入れて色鮮やかな世界を展開しました。江戸時代前期には、赤茶色に発色する赤土部や緑がかかった褐色の灰釉が器面を彩りました。江戸時代中期には、茶色の栗皮釉や漆黒の黒石釉が生み出されました。また、江戸時代後期には、精緻な薄手の器に白土を塗土した白丹波が作られました。各時代の求めに応じて変化してきた丹波焼は、2017年に日本六古窯の一つとして日本遺産に認定され、2018年には田中寛コレクションの丹波焼が兵庫県指定重要有形文化財に指定されました。本展は、開館20周年を迎えるにあたり、当館のコレクションの母胎である田中寛コレクションを中心として、氏が情熱を注いで現代に受け継いだ丹波焼を紹介し、その魅力に迫ります。



### 3. 国立工芸館【石川・金沢】 (<https://www.momat.go.jp/craft-museum/exhibitions/566>)

12月9日(火)～2026年3月1日(日)

令和6年能登半島地震・令和6年奥能登豪雨復興支援事業

ひと、能登、アート。文化財(アート)がつなぐ。Art for the Noto Peninsula

能登半島地震、奥能登豪雨からの復興を文化の力で応援するため、東京国立博物館をはじめとする都内の美術館・博物館が所蔵する多彩な作品が金沢の3つの美術館(石川県立美術館・金沢21世紀美術館・国立工芸館)に集結します。当館では工芸作品を中心に、国宝や重要文化財をはじめ誰もが知る名品の数々をご覧ください。

